

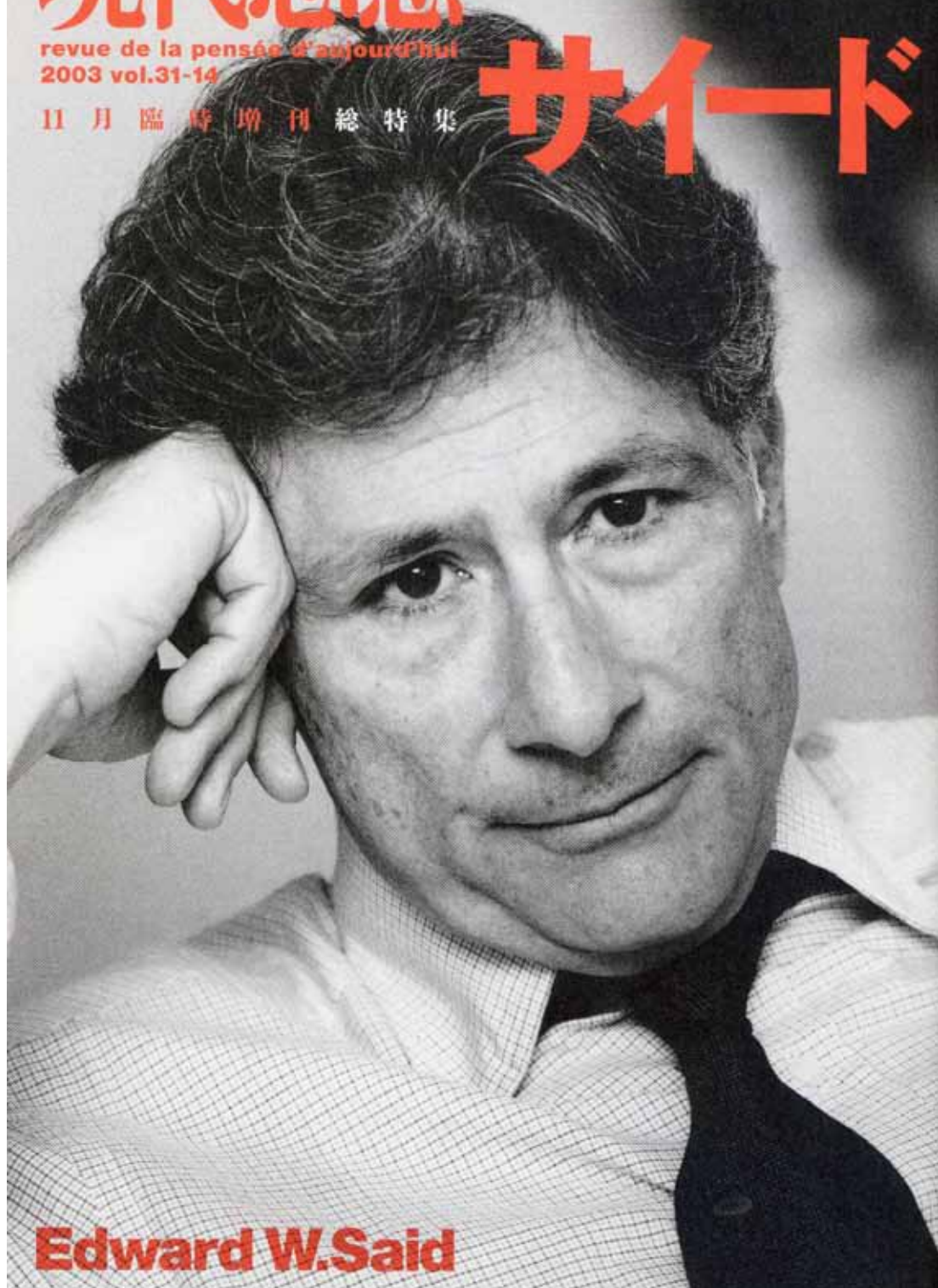
昭和48年4月12日 第三種郵便物認可 平成15年11月15日発行 第31巻第14号

# 現代思想

revue de la pensée d'aujourd'hui  
2003 vol.31-14

11月臨時増刊 総特集

# サイド



**Edward W. Said**

# シヤドウライン越し透視画法

ウラジミル・タマリ／板垣雄三(聞き手・沢)

サイドについて語る／断章

板垣 エドワード・サイドを悼む声が世界中のさまざまな方角から聞こえてくるのに、パレスチナ人の声にはそれほど耳を傾けよう

としないのが、日本のメディアの現状です。パレスチナ人といえば「自爆テロ」の「犯人」、あるいは「イスラエル軍が×人殺害」と紙面の片隅に数字で片付けて済みます「過激派」、そんなイメージの振りまきとはまったく無関係に、あるいはそれだからこそ孤高の人として、サイドは記念されているようにも見えるのです。そこで、ながらく漂泊者として東京にお住まいのパレスチナ人画家ウラジミル・タマリ(ヴラディミール・タマリー)さんから直接話を聴こうと思い立ちました。

かつてサイドの『オリエンタリズム』の翻訳を出そうとしたとき、出版社からこんな本は売れないとさんざん嫌味を言われたことを思い出します。やがてそれは普及版にまでなりましたが……。ウラジミル・タマリというパレスチナ有数の画家・知識人が身近に暮らしている事実とその意味に、日本社会が気付かないでいるのは、

その鑑識眼の衰えとひそかに憂えているのです。

さて、ウラジミル。差し支えなければ、あなたとエドワードとの付き合いはどんなものだったのか話してくれませんか。

タマリ エドワード・サイド(アッラーフ・イルハモ「最近亡くなった人について」、「神よ、彼の魂を休ませ給え」)は私より少しだけ年上の世代であり、また一九四八年以降パレスチナ人は追い散らされてしまったので、彼が日本にやってきたとき以外、私は彼と出会う機会がなかったのです。私がベイルート・アメリカ大学(AUB)の学生だったとき、彼の妹の二人とは一緒に、彼の妻となるマリウムもそのとき学生でした。彼の下の子とは同じグループの親しい友達でした。私の姉のタニア・タマリー・ナースイルは、ことに(ヨルダン川)西岸(地区)の音楽事情とのかかわりで、エドワード夫妻と親密でした。東京でエドワード夫妻と会ったとき、私たちはとてもなく共通の知り合いのたくさんの人たちのことを語り合ったのです。

板垣 来日したエドワード夫妻は、誰よりも早くまずあなたと会おうとして、成田からあなたのところへ直行したと聞いていますが、出会いはどんなでしたか。

タマリ 遠くから姉が手配したのです。彼はあたたかで、真摯で、相手をひきつける人でした。会話はすばらしいものでした。私たちは政治向きの話はあまりしませんでした、パレスチナの悲劇については、幾分か見通しの違いがあることがすぐ分かりました。エドワードは、パレスチナ人指導部のあるべき姿として「空高く舞い上がる」必要を語るのでした。……ところが、私が感じていたのは、パレスチナ民族にとって生起する現実があまりにも圧倒的なもので、しかも敵は強くなる一方なので、彼の話は一種の奇蹟であり、われわれにできるのは、ただ生き延びるため「漂流する」だけなのではないか、ということでした。やがてほんの少しましな日は来るという希望を絶やさぬためには、それだけでも英雄的努力が必要なのです。私は自分の考えを洗いざらい言ったわけではありません。ただ、そう感じたのです。

板垣 ウラジミール、あなたは彼のキャリアや思想背景をどんなふう

に評価し分析していますか。  
タマリ 私は、彼の志操の堅実さ、知識、そして独創性に大いなる尊敬を抱いています。彼の著作を読めば読むほど、彼の才能の偉大さへの評価はいや増すのです。彼はニューヨークの日常生活の中にあって、われわれの時代の事象に対する主体的・実践的参加——サルトルのいうアンガージュマン——に身を挺する知識人の役割を明確に自覚していました。しかし、むしろそのためにこそ、彼はパレスチナ人としての体験を欧米に対して表明し説明することに全精力

を振り向ける選択をしたのです。彼の成功は、彼がかちえた世界大の低い評価によって測られるだけではありません。四〇年前、欧米のパレスチナ人観は嫌悪か憐れみ以外の何物でもなく、われわれの立場はまったく誤解されるか無視されるかしていました。パレスチナ革命はわれわれのあたりまえの要求に対する世界の関心と呼び覚ましでしたが、われわれの主張を欧米の人たちに理解できることばでもっとも適切に説明したのは、エドワード・サイードだったので

す。他方同様に、彼は、明確なビジョンと政治的立場を表明する勇氣とによって、アラブ大衆のところに希望を吹き込み、誇りと自信を取り戻させたのです。

板垣 サイードの学術的業績については、どのように見えていますか。  
タマリ 彼の広範な学識と著述の明晰さには感銘しています。ジョゼフ・コンラッドの小説は私もそのほとんどを愛読していますが、エドワードがコンラッド研究の専門家だということを知って興味はさらに刺激されました。日本に流亡して孤立している状態の私には、現代の知の世界にエドワード・サイードが及ぼしたインパクトを全面的に判断する力はないのですが、彼が知的・公共的な圏域の人々に与えた印象が強烈なものだったことは確かだと思います。世界は、イスラエルや米国の侵略的なネオ帝国主義に恐れを抱くとともに、第三世界の中のいくつかの集団がそれに反撥する暴力にも悩んでいます。人々は、目前に起きつつあることの解明を求め、引き裂かれた諸世界の衝突と見えるものに解決がもたらされる希望を抱いて、サイードの作品に立ち返るのです。彼はいわば西と東の架け橋であり、多くの人がこれに信頼を寄せていると言えるでしょう。

板垣 ウラジミール、ところで彼はあなたの仕事をどのように評価し



タマリ夫妻とサイド夫妻

ていたでしょう。

タマリ 彼は東京で私の描いた絵を見、私はその一つを彼にプレゼントしました。彼が私の芸術活動を褒めてくれたことを私は大変誇らしく感じています。

板垣 エドワードにとって、政治と音楽がどんな関係にあったのかについて、あなたはどうか眺めていますか。

タマリ エドワードの友人でイスラエルの音楽家であるダニエル・パレンボイムが西岸でコンサートを開いたり、音楽を通じてイスラ

エル人とパレスチナ人の若者たちの友愛を育てるグループを結成したりする活動を、エドワードがつよく支持したのは、すばらしいことだったと思います。私の姉のタニアはこうした活動に積極的に加わっており、それについての長大な論説も書いています。

板垣 あなたはヨーロッパのクラシック音楽を聴きながら絵を描くのですね。ウラジミール、あなたにとって絵画と音楽とはどんな関係にあるのですか。

タマリ 一九六〇年代の初め頃、私は「ビジュアル・ミュージック」の短編映画を作る実験をしました。そこでは、バッハのブランデンブルク協奏曲の曲調に乗って色彩が躍動するのです。私は、私のアートの作曲の流れのように「動く」のを望んでいたのです。そのとき、私はそんな夢がすでに数百年の歴史をもつものだったということに気付いていませんでした。最近二年以上を費やして、私は二四人ほどの作曲家の曲を聴きながら二五点ほどの作品を仕上げました。一月はバッハ、一月はブラームス、といったようにです。私は、この不思議な経験についての文章を、ビジュアル・ミュージックの略史とともに、すでに書くこともしました。

板垣 あなたとエドワードとの間で、批評とその方法について、意見の異なるところがあると思いますか。

タマリ 比較など、とても成り立ちません。彼は学者であり体系的な仕事をするが、私がやる批評はとかく情緒に流され、皮肉っぽいものです。エドワードは指揮台に立っており、知的リーダーとしての責任を負っていました。私は日本に逃れ、「身を隠し」、安穩に自分自身のアートと研究に打ち込んでいるという状態です。もちろん、私もパレスチナを忘れることは絶対にありません。これまで時には、

私もパレスチナの物語を公衆に知らせる働きをしようとしたことはありました。しかし今は、私は一人の芸術家であるだけでよいのだと納得しています。

板垣 離散の地に住むパレスチナ人知識人として生きたエドワード・サイドは、同様の立場にあるあなたの目には、どのように映っていたのですか。

タマリ エドワード・サイドが書いたものを読むまでは、私が離散パレスチナ人の一人として経験してきたことを表現してくれたと確信できるパレスチナ人の「声」に、ほとんど接することがなかった。私は感謝したいのです。一つの国に暮らしながら、引き裂かれたところはたえず別の国にある、というわれわれの生きざまを説明する努力を、彼がしてくれたことに、私は感謝しています。

板垣 全世界の知性に対して彼が残したもつとも重要なメッセージは何だったと思いますか。

タマリ 欧米の人々に対して、彼は、第三世界の人々、ことにパレスチナ人、アラブ、ムスリムたちが、みずからの声で語るに値するみずからの物語をもっているということ、それが欧米の側の研究や好奇心の対象にとどまっているべきではないということを、示したのでした。そして、第三世界の人々に対しては、彼は、欧米の人のすべてが攻撃的な帝国主義的抑圧者であるのではなく、われわれの抱える問題を理解し状況の変革を望む多くの人もそこにはいるのだということを示しました。彼は現実の事態をただしく歴史的コンテクストの中に置いたのだと思います。すなわち、力を持つ者が力なき人々に加える帝国主義的虐殺が持続しているというコンテクストの中に、です。

板垣 こんにちはパレスチナ人の上にまたもや降りかかっている新たな「破局」に直面しつつ熟考していたエドワードにとっては、救出されるべき人類の未来ビジョンとは何だっただろうと思いますか。

タマリ 彼は、不正を見据え、それを今、その場所で、克服する方策を示そうと最大限の努力を傾ける戦士だったのだと、私は思います。そこで彼は、長期的な企画立案や将来の予言などのあれこれに手を染めるよりは、ずっと現実主義者だったのです。彼は、こんにち人々の多くが議論している二国家並存の解決方式よりも、イスラエル人とパレスチナ人とが共存する単一の二民族国家を選ぼうとしたのでした。私の意見では、単一の二民族国家の方式では、イスラエル人が西岸の併合にイスラエル人とパレスチナ人それぞれの郷土（ホームランド）を統合するのだという勝手な解釈を施して、パレスチナ人の権利をさらに奪う危険があると考えます。エドワードも、こんにち、わが民族に襲いかかってきた新たな「破局」には深く失望していたのであり、これはパレスチナ人誰しも共通のことです。板垣 あなたの観察では、彼にとつて、キリスト教とはいかなるものだったのでしょうか。

タマリ 彼はキリスト教徒の家族の一員として生まれましたが、著作の中で幾度か暗示していたように、彼は実際には無神論者だったようです。私は彼の立場をいずれにしても尊重しますが、私自身はこれを残念なことと感じています。それは、パレスチナに生まれパレスチナで十字架の上に死んだイエス・キリストこそ、こんにち無実のパレスチナ人が忍んでいる苦難の姿の完全無欠のシンボルだからです。詩人のマフムード・ダルウィーシュや画家のイスマリーール・シャンムートは、いずれもパレスチナ人のムスリムですが、彼

らも作品の中で、キリストの十字架上の死とパレスチナ人の苦難の現在とを関係づける表現をおこなっています。

板垣 エドワードにとって、エルサレムという都市はどんな意味をもっていたのでしょうか。

タマリ あらゆるパレスチナ人にとってエルサレムという都市がもつ重要性を彼が知っていたのは言うまでもないことです。彼が個人としてエルサレムに対して感じていたことについては、よく知りません。

板垣 世界中でエドワード・サイードの死を悼むあまたの文章が発表されていますが、あなたの目に触れたことばの中で一番印象に残る一節がもしあったら、挙げてください。

タマリ 特別に記憶する一節を引き出すことはできませんが、東西の主要な新聞・雑誌のすべてが、マイクロソフトのオンライン・ニュースまで、彼の死を一齐に報じ、つぎつぎとコメントを掲載した事実の驚きの印象は鮮明です。私には、彼がそれほど卓越した国際的人物になっていたということが、最初は信じがたいほどでした。

板垣 日本でも、エドワード・サイードは、病身を押し首尾一貫して知的誠実さと良心を堅持した知識人として、追悼されているように見えます。しかしながら、残念なのは、彼の立場や仕事について「共感をもって」記念する人たちが、まさしく今パレスチナで起こっている現実の事態そのものには、かならずしも眼を向けていないというチグハグな状況があることです。日本社会でのサイード追悼が、何となくそれ自体で自足した知的ファッションのご挨拶へと墮している雰囲気、私はピリピリせざるをえません。境界線を設定することの暴力性への批判というサイードの問題提起の焦点が、急ピツ

チでパレスチナ人の生存の条件を切りさいなみながら強行されるモンスター的「隔離壁」建設のもとにある現在の西岸、そして重層化する分断を包摂しつつそれ自体一個の巨大ゲットと化した現在のガザ地帯、さらにパレスチナ問題の境域から最終的に排除されようとしている現在のディアスポラ（離散）・パレスチナ人、等々への凝視という課題とは、離ればなれにされてしまっている現状がかいま見えることに、怒りを感じるのです。エドワード・サイードの死とパレスチナで日々横死を強いられている多数のサイードの同胞たちの運命とのあいだにあるつながりを、切断了サイード追悼が忍び込んでいないか、これが私の懸念です。彼の知的世界とパレスチナ人の現実とのあいだに隙間をつくって平気な言説や態度は、エドワード・サイードという人とその仕事を否定することだとすら言えるのではないかと。私の苛立ちばかりを言い立ててしまいました。日本社会においてサイードが記念される仕方に関して、もし何か気になる点があれば、率直に言ってください。

タマリ 日本人は中東の諸事件からは遠く離れた島に住んでいるのだし、第二次世界大戦後を生き延び、復興し、発展させた努力は、日本人のエネルギーのすべてを注ぎ込むようなものだったのでしょう。現代日本の成功のおかげで、日本人は周りを見回し世界情勢をもっと丹念に研究することができるようにも生じてきたのです。エドワード・サイードがパレスチナ人だという事実は、それ自体重要なことです。三〇年前には、当時イスラエルのゴルダ・メイル首相は「パレスチナ人などというものは存在しない」と主張してさえいました。エドワード・サイードが日本で名声を勝ち得たとすれば、人々はおのずから自動的に、何らかのかたちで、いずれは、われ

われパレスチナ人の主張する立場に注意を払ってくれるようになるでしょう。あなたや、その他多くの日本の友人たち、またさらに私の知らないその他の人々が、日本というこの偉大な国とパレスチナ人とのあいだで、双方が必要とするときに備えて両者を結ぶ「橋」を架けるべく献身的な努力を惜しみなく尽くしてくださっていることを、私は誇らしく感じ、また感謝しているのです。

板垣 日本では、米国とイスラエルの宣伝の影響を受けて「中東和平」の意味を誤解し、占領者＝抑圧者と被抑圧者＝抵抗者とのあいだの違いを識別せずに、イスラエル国家とパレスチナ人との「紛争」の両当事者と見なして「互譲」を求めるばかりか、まずは一般のパレスチナ人まで丸ごとテロリスト予備軍のごとく扱って、パレスチナ人に抗議や抵抗をやめると迫る論調の報道が恥も知らず罷り通る悲しい状況が、まだ続いています。

また、今、かつてナチズムがユダヤ人に対しておこなったホロコーストの犯罪行為を真に批判する立場を貫こうとするなら、文字通りただ今、パレスチナ人に対してイスラエル国家が実行している目の前の迫害と虐殺を黙視するわけにはいかないのです。ところが、ユダヤ人ホロコーストはユダヤ人ホロコースト、パレスチナ人狩りはパレスチナ人狩りと、別々の話になっていて、パレスチナ人の少女たちが書く「アンネの日記」にも、封鎖された地区の密集する民家にミサイルが打ち込まれるパレスチナ人の「夜と霧」にも、日本人の想像力は眠ったままです。

エドワードが彼の生と死を賭けて帝国主義に向かって挑んだ文化のたたかいを記念することが、パレスチナ問題の理解をどのように促進するだろうか、その可能性について、あなたの見通しを聞かせ

てください。

タマリ 本来は世俗的なシオニズムの思想・運動の周りにつきまとう宗教的色彩が、パレスチナ問題を複雑なものに仕立てていると思います。しかし、イスラエルは、本質的に数百年前の大航海時代に端を発するヨーロッパ植民地主義・帝国主義が最後まで尾をひいているその痕跡だと言えるでしょう。不幸なことに、米国は今やグロバル帝国主義の新局面を自由勝手に押しあけることができる気分になっていきます。パレスチナの直面する問題は歴史が生み出したこれら二つの局面の交錯する中心にあるのです。パレスチナで起こりつつあることは、間もなく世界全体で起きるでしょう。だからこそ、公正・正義と平和とをパレスチナで実現することが重要なのです。エドワードは、このことを明確に理解していました。彼の死は世界にとって大きな損失ですが、彼が残したものは世代を越え、力強く生き続けます。

板垣 最後になりましたが、読者のために、あなたご自身の経歴を簡単にお願いします。

タマリ 私は一九四二年、エルサレムで、パレスチナ・アラブの両親のもとに生まれ、二〇歳代の初めまでラーマツラーで暮らしました。レバノンのベイルート・アメリカ大学で最初、物理学を、ついで美術を学びました。私は一年間の米国学留の期間中に私の妻となる京子と出会い、一九六七年戦争の直後にベイルートで結婚しました。私たちは一九七〇年に日本に移り、それ以来ずっと日本で暮らしています。私はパレスチナと日本とのあいだをつなぐ「橋」を築くパイオニアになろうとして、パレスチナ難民の子どもたちの絵を展示する展覧会を開くことに熱中したこともありましたが、一

九七〇年代に出現した過激なグループの行動のあおりを受けて、「パレスチナ」ということばそれ自体が危険なテロリズムを表すものと誤解されるようになり、政治的圧力が加わって日本人にパレスチナ問題の実状を知らせる活動を進めるのもむずかしくなりました。私は、そのようなときから現在にいたるまで板垣雄三教授からいただいた支持と友情とを誇りにしています。先生は、エドワード・サイードと同じように、人のたましいを励ます行動的知識人の一典型だと思っています。先生や先生の同僚・学生たちは、日本とパレスチナ・アラブ世界とのあいだだけでなく、日本と他の地域とのあいだでも、架橋を発展させることに成功してきました。日本では、愛する妻・京子の支えがあつて、私もこの文化交流・協力の活動にいささか尽くすことができましたが、その後はだんだん、絵を描くことと三次元製図器の発明とに遙かに力を注ぐようになり、さらに最近では物理学の研究に熱を入れています。日本に来てから、二人の娘、マリウムとモナが生まれましたが、今では、日本とパレスチナ、そしてパレスチナの向こう側にあるより大きな世界とのあいだの相互理解、平和、友好のための「橋」づくりに貢献する娘たちの時代がすでに始まったようです。

板垣 ありがとうございます。

ソプラノ歌手として活躍しているお嬢さんのマリウムは、ニューヨークのエドワード・サイードの家で、エドワードが親切に、また真剣に、話を聴いてくれた感激を、私にもしてくれました。そういえば、つい最近では、マリウムは来日したパレンボイムから公演に毎回のよう招待してもらい、彼と親しく話をするのができたそうですね。すてきなニュースでした。

あなたのお姉さんの、これまたソプラノ歌手であるタニアが西岸で進めている平和のための音楽活動のことは、すでにうかがった話の中でも触れられましたが、そのタニアから先日、私はパレスチナの野に咲く花々をモチーフとする美しいカラー写真の刺繍の本をプレゼントされました。また、ビールゼイト大学でイスラームの美術工芸を教えているあなたの妹さんのヴェーラからは、うっとりするほど美しいパレスチナの服飾・装身具の細部に専門家の眼が凝らされた記録写真を絵はがきに仕立てたセットを、最近贈られました。パレスチナでは、野の花をめでて観察し刺繍として表現することも、社会生活がズタズタにされている「破局」のもとですばらしい発色の美装本を製作する職能を育てることも、そして伝統的な工芸の美を記録することも、文化を護り、文化を獲得するきびしいたたかいの一つ一つの局面なのだということを、あらためて痛感させられています。日本ではパレスチナ人というたとすぐ「自爆テロ」を連想する人が多いのですが、むしろ圧倒的多数の人々が、出口も見えず苦難の闇が深まる一方の異常な状況を理性的に耐え忍びながら、貧しさや絶望とを乗り越えて文化創造へと向かっているのです。このような大衆の日常のしずかなたたかいこそ、私たちは注目すべきでしょう。それこそが、異郷にあつても、むしろ異郷にあるからこそ、エドワード・サイードの知性を燃焼させ光輝を発するようになされた基底の力だったのだ、と思うのです。ウラジミール、あなたの絵画とビジュアル・ミュージックと物理学のめざましい発展・成功を、そしてあなたと一族の皆さん方の健康と幸運をここから願っています。